報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　都賀庭鐘における漢籍受容の研究―初期読本の成立―

氏　　名　劉　菲菲

論　文　内　容　の　要　旨

江戸時代中期、大坂で活躍した医者で著述家の都賀庭鐘は、それまでの日本の歴史上、突出して大量の漢籍を読破した人物である。すなわち、白話小説（口語体で書かれた通俗小説）を含む、あらゆる分野の漢籍を読み、そこから得た新奇な素材を、日本の歴史譚や説話、伝説、軍記、謡曲と融合させ、『英草紙』『繁野話』『莠句冊』『通俗医王者婆伝』『義経磐石伝』など数々の斬新な翻案作品を著し、文学史に読本という新たなジャンルを切り開いた。また、『康熙字典』『開巻一笑』『閩書』の和刻本を出版するなど、江戸時代における中国文化の受容を考える上で、最も重要な人物である。

庭鐘の読本は、語彙や表現から筋や趣向に至るまで、和漢の文献つまり典拠を踏まえており、それらを究明しなければ、作品に込められた作者の真意を理解することはできない。したがって、典拠の探索は最優先で取り組むべき課題である。庭鐘読本の典拠研究については、夙くより山口剛、宇佐美喜三八、麻生磯次、中村幸彦、徳田武などの先学により基盤が築き上げられてきた。ただ、庭鐘は予想以上に広範な和漢の文献を駆使しており、その翻案の技法も彼の知的レベルを反映して難解で、いまだ明らかにされていない部分が多く残されている。

本論文の主目的は、幸いにして残された庭鐘の読書過眼筆記『過目抄』を最大限に活用することにより、庭鐘の読書の実態を解明し、従来典拠不明とされてきた庭鐘の作品の出典を解明することである。そのことを通して、江戸時代中期の日本の文壇が、いかに高いレベルで漢籍を受容し、重要な文化的影響を受けたのかを明らかにする。

【第一部】　庭鐘読本の典拠研究

従来典拠不明とされてきた庭鐘読本の出典を新たに指摘する内容でまとめた。

第一章　『英草紙』第六篇「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」典拠考

『英草紙』は全九篇より成り、第六篇以外は既に典拠が明らかにされている。第

六篇は三つの小話を含んでおり、その内の第二・三話の典拠が従来未詳であった。本章では、まず、第二・三話は明代の類書『緑窗女史』所収の「馬湘蘭伝」に拠ることを指摘した。また、第一話の典拠である「王幼玉記」を翻案した箇所について、『青瑣高議』や明代の諸類書『緑窗女史』『剪灯叢話』『青泥蓮花記』『艶異編』『情史類略』に載る王幼玉の話と本文を比較検討し、庭鐘が直接依拠したテキストは通説とされる『青瑣高議』でなく、『緑窗女史』である蓋然性が高いことを検証した。さらに、第六篇の冒頭文に見られる、妓女と良家に関する言説は、清代の白話小説『照世盃』巻一「七松園仮を弄して真と成す」に想を得て作られた可能性を論じた。

第二章　『莠句冊』第五篇「絶間池の演義強頸の勇衣子の智ありし話」典拠考

『莠句冊』は庭鐘の晩年作で、全九篇から成る。処女作の『英草紙』より難解で、研究が遅れている。最も力を入れて書いた第五篇は、四つの小話を含んでおり、その内の第二・三話の典拠は従来未詳であった。本章では、まず、第四話の典拠である茨田堤説話について、『日本書紀』と『五畿内志』所収の「河内志」を比較対照し、庭鐘が直接依拠したテキストは通説とされる『日本書紀』でなく、「河内志」であることを検証した。また、第二話は明代の長編白話小説『禅真逸史』に、第三話は『禅真逸史』の後集である『禅真後史』に、それぞれ趣向を摂取していたことを指摘した。

第三章　『通俗医王耆婆伝』典拠考

『通俗医王耆婆伝』（以下『耆婆伝』）は、全十回より成り、仏典『仏説柰女耆婆経』を粉本とした翻案作品である。第一・五・六・七回は出典不明で、他は全て『仏説柰女耆婆経』に依拠して話を進めている。本章では、まず、第一・五回の典拠は明代の長編白話小説『金瓶梅』にあることと、第六・七回は『禅真逸史』『禅真後史』から素材を取っていたことを指摘した。また、『耆婆伝』を創作する際に、庭鐘は複数の書物を机上に置いて参照したと見られ、以上のほかに、明代の長編白話小説『水滸伝』や、類書や随筆をも利用しており、それらの書目は庭鐘の読書筆記『過目抄』に見えていることを指摘した。従来、『金瓶梅』が近世文学に与えた影響は小さく、その翻案は江戸後期の曲亭馬琴『新編金瓶梅』に始まるとされてきたが、実は、庭鐘こそがその先駆で、馬琴より七十年ほども早く『金瓶梅』を翻案していたこととなる。

第四章　『義経磐石伝』典拠考

『義経磐石伝』は、全十八回より成り、『義経記』『平家物語』『源平盛衰記』『平治物語』『保元物語』『東鑑』を基礎とし、源義経の一生を描いた歴史小説である。『義経磐石伝』が依拠した日本側の文献と中国の史書は既に明らかにされている。しかし、『義経磐石伝』を詳細に読むと、白話小説に由来すると思われる場面や筋が作品の中に秘められている。本章では、まず、第六回は『金瓶梅』第五十五回に、第十五回は『初刻拍案驚奇』巻三十一に、それぞれ趣向を摂取したことを解明した。また、庭鐘が『金瓶梅』第五十五回と『拍案驚奇』巻三十一の趣向を『義経磐石伝』

に取り入れた理由を検討した。

【第二部】　庭鐘読本の新解釈

①『垣根草』の作者②『繁野話』の主題と人物造型意識という二つの問題を再検討する論考をまとめた。

第五章　『垣根草』新論

著者名を明記しない読本『垣根草』は、嘗ては都賀庭鐘作とされてきたが、近年は庭鐘作を否定するのが通説となっている。これに対して、本章では、まず、書物の体裁や出版史の視点から、『垣根草』と庭鐘作の共通点を吟味した。次に、『垣根草』と庭鐘真作に共通して見られる語彙や表現を比較考察し、これらは第三者が庭鐘作を模倣利用したのではなく、庭鐘自身による可能性の高いことを指摘した。さらに、従来典拠不明とされてきた第三・五・十話がそれぞれ『宣室志』「陳袁生」、『三国志演義』第三十八回、『五朝小説』「針異人伝」に拠ることを明らかにした上で、それらを含めて、これまで判明した典拠書物は何れも庭鐘の読書範囲にあることを示した。また、『垣根草』の翻案手法が、庭鐘のその他の作品と共通することを論じた。最後に、『垣根草』が庭鐘によることの傍証として、作品の根幹にある作者の価値観が共通することを確認した。以上の諸方面からの検証により、『垣根草』は庭鐘真作である可能性が高いと結論づけた。

第六章　『繁野話』第八篇「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈る話」新論

『繁野話』第八篇は、明代の白話小説『警世通言』巻三十二「杜十娘怒沈百宝箱」を下敷とした翻案作品である。原拠の筋を忠実になぞっているように見えながらも、両作品の本文を詳細に照らし合わせてみると、細部の描写に多くの異同が見られる。本章では、まず、小太郎と李甲の登場する場面の描写を比較し、庭鐘は小太郎を原拠の李甲よりも否定的に描き、複雑で多様な側面を持つ人物として造型しようとしたことを指摘した。さらに、白妙と杜十娘の登場する場面の描写を比べ、庭鐘は原拠以上に同情や理解を込めて遊女の白妙の運命を描いたことを明らかにした。また、従良に執着する遊女の不幸な運命を主題とした原拠と異なり、庭鐘は遊女の内面の気性に眼目を置いていることを指摘した。最後に、第八篇の冒頭文は、『初刻拍案驚奇』第二十五回「趙司戸千里遺音、蘇小娟一詩正果」の冒頭文に影響を受けて書かれた可能性を検討した。

【第三部】　庭鐘の読書と読本習作

①庭鐘の読書筆記『過目抄』とその読本作品との関わり②庭鐘読本の白話語彙の使用実態という二つの問題について考察する論考を配した。

第七章　庭鐘の読書筆記『過目抄』とその読本習作

『過目抄』は約七十種類の和漢の書物からの抜粋が記されている。それにより、庭鐘の読書を再現することが可能で、その読書の内容が具体的にどのように読本作品と繋がってゆくのかを窺い知ることが出来る。つまり、庭鐘の学問と作品を知る上で、『過目抄』の詳細な分析は必須である。本章では、まず、抄出された出典書物を特定し、庭鐘の読書範囲を明らかにした。また、庭鐘の読書と古義堂との関係について検討を加えた。最後に、『過目抄』と庭鐘の作品を照合し、作品の語彙や表現、細かな素材が、どのように『過目抄』と直接関わるのかを検証した。

第八章　庭鐘読本の白話語彙考―『通俗医王耆婆伝』を中心に―

原拠の『仏説奈女耆婆経』（以下『耆婆経』）は通常の文言文（漢文）で記されているのに、『耆婆伝』は白話語彙（口頭表現）を大量に含んでいる。本章では、まず、『耆婆伝』に見える白話語彙や表現及び白話文法を摘出・整理して、その全容を具体的に明らかにした。また、庭鐘の白話語彙の使用実態を分析し、その誤用をも指摘した。さらに、庭鐘は、『耆婆経』の文語を白話語彙に置き換える方法と『耆婆経』の行文に白話語彙を点綴する方法の二つの手段を取って、白話語彙を作中に用いたことを検証した。最後に、それらの白話語彙は、既に判明している庭鐘の読んでいた白話小説『水滸伝』『禅真逸史』『禅真後史』などに見られることを指摘するとともに、庭鐘自製の白話小説の単語集の存在を推定した。